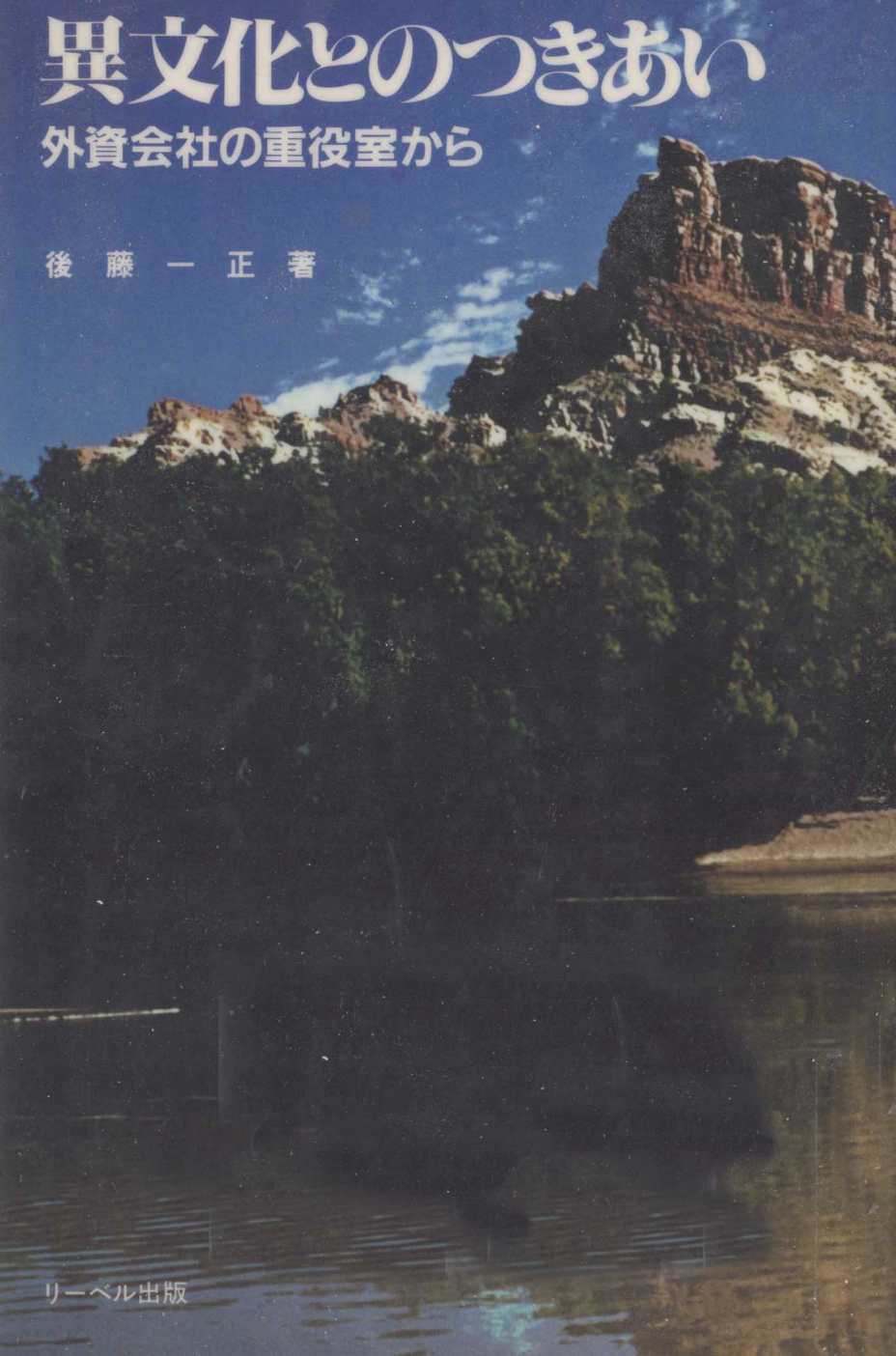
異文化とのつきあい

外資会社の重役室から

後藤一正著



リーベル出版

異文化とのつきあい

後藤一正

リーベル出版

後藤一正(ごとう　かずまさ)

1925年　台湾台北市生まれ.
1948年　京都大学法学部卒.
同　年　通産省に入り，企業調査課長，大臣秘書官，ロンドン・ジャパン・トレード・センター所長，生活産業局審議官，アルコール事業部長など経て
1976年　退官.
同　年　モービル石油株式会社常務取締役.
1982年　退社.
同　年　日本エスティーシー株式会社代表取締役社長.

主な著書
『ロンドンの街角から』ELEC出版部

異文化とのつきあい

1982年9月1日　初版発行 ©　　定価980円

著作者　後藤一正
発行者　串原国穂
印刷所　西田整版
製本所　関山製本社

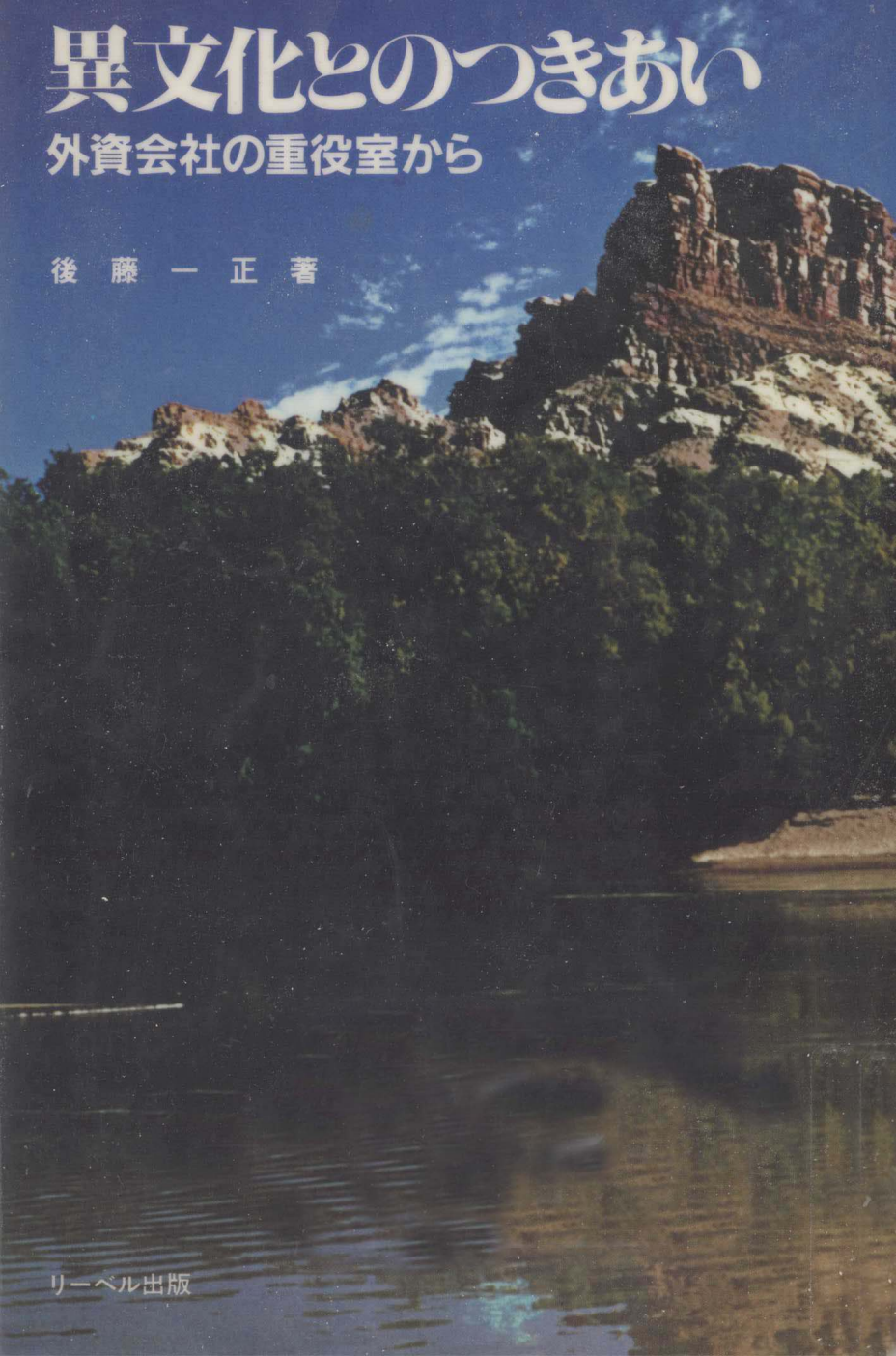
発行所　リーベル出版株式会社
〒101 東京都千代田区神田神保町3-17-3
電話 (03) 234-1368　振替東京6-70627

ISBN 4-947602-14-7　C0095　¥980E*

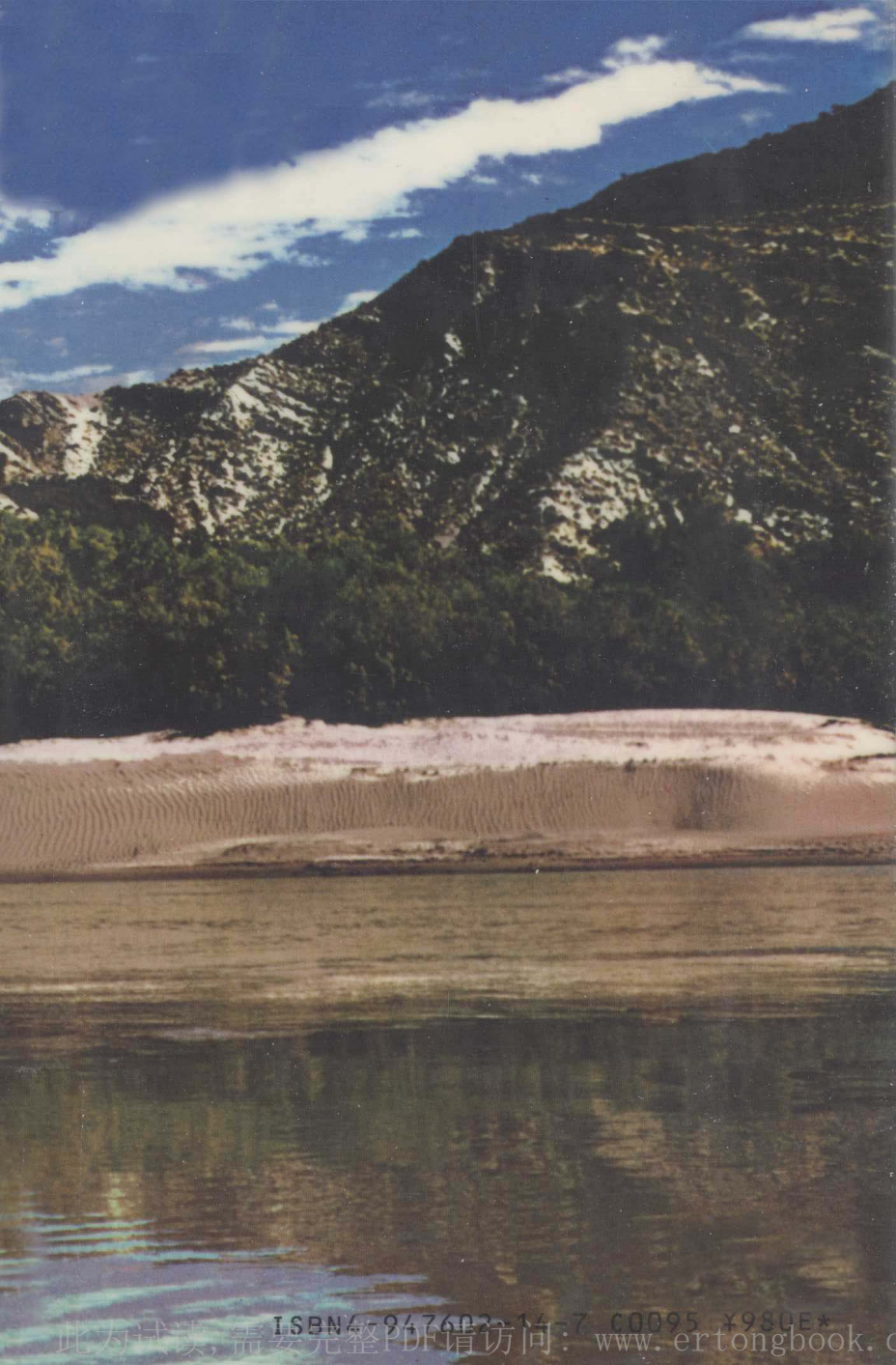
異文化とのつきあい

外資会社の重役室から

後藤一正 著



リーベル出版



ISBN 7-84760 3-14-7 C0095 ¥980E*

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

後藤一正(ごとう　かずまさ)

1925年　台湾台北市生まれ.
1948年　京都大学法学部卒.
同　年　通産省に入り，企業調査課長，大臣秘書官，ロンドン・ジャパン・トレード・センター所長，生活産業局審議官，アルコール事業部長など経て
1976年　退官.
同　年　モービル石油株式会社常務取締役.
1982年　退社.
同　年　日本エスティーシー株式会社代表取締役社長.

主な著書
『ロンドンの街角から』ELEC出版部

異文化とのつきあい

1982年9月1日　初版発行 ©　　定価980円

著作者　後藤一正
発行者　串原国穂
印刷所　西田整版
製本所　関山製本社

発行所　リーベル出版株式会社
〒101 東京都千代田区神田神保町3-17-3
電話 (03) 234-1368　振替東京6-70627

ISBN 4-947602-14-7　C0095　¥980E*

芸文化とのつきあい

藤一正

リーベル出版

幸子に

知子に

コロラドへ——序にかえて

「本のカバーはわずらわしいばかりだ」（本書九十二ページ）と書いている筆者が自分の本にカバーをつけたのは少々気がひけるが、美しいコロラドの風景写真を使ったので何卒ご鑑賞頂きたい。筆者がこの四月から新たに勤めることとなった日本エスティーシー株式会社の親会社であるストレージ・テクノロジー・コーポレーション（本社、米国コロラド州ルイスビル）の提供にかかるものである。

筆者は昨年十月はじめてコロラドの地を訪れた。かなり旅慣れているつもりではいても、十月某日午後六時に成田を飛びたってピッタリ同月同日同時刻にデンバーに到着するというのはいささか奇異の感を免れない。丁度日本エスティーシーを手伝ってほしいという話がもち上っているときで、煮え切らない筆者に「ともかく親会社の工場を一度見にいらっしゃい」と勧めてくれるのを額面どおり受けとって、当時の勤務先から短い休暇を頂いて出かけたのだった。もちろん工場も案内してもらったが、大半の時間は息つく間もないインタビューの連続で、「自分に工場を見せることもさることながら自分を親会社の幹部に見せることが主たる目的だったのだな」とあとで気がついたのはのんきを通りこしてうかつだったとしかいいようがない。

短い滞在中かつて経験したほどのない時差ボケに悩まされた。鉛のように重い頭を抱え、息も

たえだえで、しかも顔だけはなるべくニコニコしながら多少いりくんだ話を英語でするというのはなかなかの苦業である。「年のせいかもしれませんね」と嘆いたら必ずしもそうではなく、気圧が低く空気が薄いので時差の影響が一般に強く出るのだと慰められた。デンバーは海抜約六千フィートのところにあってワン・マイル・シティなどとも呼ばれ、お湯は一〇〇度以下で沸くし、自動車はエンジンを調整しないともうもうと黒煙を吐くし、朝ジョギングをしていると警官が呼びとめて旅行者の場合には平地のつもりでムリをしないようにと注意するそうだ。

それを別にすれば、ロッキー山脈のふところに抱かれたデンバーやルイスビルの風景や、透明な日の光や、爽やかな空気はすばらしい。人情も比較的醇朴なようだ。しばしば利用したタクシーの運転手さんたちもみな親切で人なつっこく、ニューヨークあたりとは雲泥のちがいである。ホテルの食堂のウェートレスの大半がコロラド大学の女子学生で、若く、美しく、機智にとんだ応答をしてくれるのも楽しかった。

旅の塵払いもあえぬ我ながら
　　また新たなる旅に立つかな

原典が見当らないので多少間違っているかもしれないが、昔読んだ河上肇の『自叙伝』のなかにあった歌だ。たしかかつての愛弟子櫛田民蔵に自説の誤りを完膚なきまでに批判され、悩みかつ苦しんだのちそれを全面的に受けいれて、新たな学問体系の構築のための勉強に着手したとき

の歌だったと記憶する。前の職場で至って快適に働かせてもらったあげく、同僚諸君の励ましを受けながら新たな職場に転じた私に河上博士のような悲愴感はないが、コロラドに本拠を置く新しい会社へ、そして全く未知な仕事の世界へ、改めて出発するに当たって、いささかの感慨を抑えることはできない。

この本の中心をなすのは、昭和五十五年七月から十二月まで毎週一回日本経済新聞夕刊「あすへの話題」欄に寄稿させて頂いた小文二十六篇である。考えの未熟と表現の稚拙とを毎回反省させられながらの苦しい連載であったが、まとめて読み返してみたいといって下さる何人かの方々のお言葉を真にうけて一本を編さんすることにした。連載中挫けがちな筆者を叱咤激励して下さった日本経済新聞社文化部長刀根浩一郎、同次長田村祥蔵両氏ならびにいつも有益なヒントや助言を与えてくれたモービル石油広報部の同僚諸君にあつく御礼申し上げる。なお、他の場所に発表した小文のうち、関連するテーマを扱ったものも併せて収録することとした。

出版については、前著『ロンドンの街角から』でお世話になった串原国穂氏をわずらわせた。エレック出版部の解消にともない、同氏はリーベル出版社を興してエレック時代の同僚伊藤和子さんなどとともに活躍しておられる。両氏の相変らず行き届いた手配りに感謝するとともに、同社の社業の隆盛を祈りたい。

昭和五十七年七月

後藤一正

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

コロラドへ——序にかえて　6

異文化とのつきあい

ドアの開閉　14

横メシ縦メシ　16

ファースト・ネーム　18

センテネリアン　20

パリの一夜　22

アメリカ人に感心すること　24

リディアのひと言　26

ダイアローグ　29

ヨコハマ・インタナショナル・スクール　32

ニュー・イヤーズ・レゾリューション　35
観劇　37
国際化　39
英語の勉強　41
海外子女教育　43
中野賢作先生のことなど　47
ライシャワー博士のコミュニケーション論　53

飲食の文化考

秋深し　58
中華料理　60
再び中華料理　62
男子厨房に入る　64
澄んだドゥブロブニク　66
腹のことと頭のこと　71

犬養孝先生 73
イギリスパブ事情 75
氷頭なます 89

身辺些事

もったいない 94
日本よいとこ 96
碁 98
省略 100
柿 102
夏時間 105
石油の開発 108
ゴルフの効用 111
師走の休日 113
フレッシュマンのみなさんへ 115

ノラ猫 118
私のプライベート・タイム 120
私の選んだ本 122
雑種の弁 125
初出書誌一覧 132

異文化とのつきあい

ドアの開閉

ビルの入り口に、大きなガラスのドアがあって、これを押したり引いたりして出入りするようになっているところがある。みていると後続者にかまわずドアをバタンと開け閉めして出入りする人が多いようだ。現に私は一度、跳ね返ってくるガラスのドアに高くもない鼻を文字どおりぶっつけそうになったことがあった。

イギリス人たちは、必ずといってよいくらい後続者の有無を確かめ、ぶつからぬよう一瞬ドアを押さえてあげる習慣だ。そしてお互いに「サンキュー」といいかわす。

「サンキュー」といえば、イギリス人たちは「プリーズ」と「サンキュー」と「エクスキューズ・ミー」との使い方を子供のころから徹底的に教えられて育つとのことだが、どうも事実のようだ。イギリスのふつうのビジネスマンの一日の生活のなかで何回これらの言葉がとりかわされるのか統計をとってみて、日本における対応語の使用ひん度と比べてみると面白いだろう。

早い話がレストランでボーイさんをよびとめるのは「エクスキューズ・ミー」だ。「サラダにドレッシングは？」「イエス・プリーズ」、「コーヒーにクリームは？」「ノー・サンキュー」、そして帰りに少々チップをはずめば「サンキュー・ベリ・マッチ・サー」とくるだろう。地下鉄で人の足を踏んで「エクスキューズ・ミー」といったら相手が「サンキュー」と答えたという笑い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c